

## クリスマスの風物詩、『メサイア』日本初演と演奏記録

### 河村 泰子

現在ではベートーヴェンの「第九」と並んですっかり歳末の風物詩となった『メサイア』演奏会であるが、日本国内においてクリスマスシーズンの恒例行事となったのは第二次世界大戦後のことであった。もともとはイギリスで250年以上も前に作曲されたこの作品が、いかにして遠く離れた日本に紹介され定着したのか、本邦における『メサイア』演奏の記録をひもといてみたい。

#### まずは「ハレルヤ・コーラス」から

『メサイア』の代名詞はもちろん第2部フィナーレの「ハレルヤ・コーラス」であり、日本国内でもこの曲が先行して演奏されたようである。

かなり古い記録として、1890(明治23)年に東京音楽学校(東京藝術大学の前身)に国内初のコンサートホール「奏楽堂」が落成し、その記念式典の最後に「ハレルヤ」が演奏されたとの新聞記事がある。プログラムには「西洋管弦楽」とあるのでオーケストラ伴奏付きで、演奏は雅楽演奏の専門家である宮内省式部職が担当している。

その後も国内外の演奏家や宣教師による「ハレルヤ」単体での演奏が続いたが、ヘンデル生誕250年となる1935(昭和10)年へ向けてオーケストラ伴奏による全曲演奏の機運が高まっていく。

#### 3つの“初演”

まず先行したのは鍵盤楽器伴奏による全曲演奏で、1927(昭和2)年3月、大阪で、教会聖歌隊員を中心とする混声合唱団大阪コーラル・ソサエティにより、鍵盤楽器伴奏での演奏会が開かれた。総勢91名の合唱団に外国人の独唱者を加えた大編成で、第3部まで(ただし一部は省略)の本格的な演奏としては本邦初演と言えるだろう。

そしてオーケストラ伴奏による本格演奏は東西ではほぼ同時に実現した。10年前にオーケストラ伴奏付きで「ハレルヤ」演奏の経験をもつ同志社が、1935(昭和10)年10月29日、第1部と第2部の全曲演奏を実施したのである。この演奏会はラジオ中継され大きな反響を呼び起こすことになった。

一方の東では同じ年の12月14日、東京音楽学校により、ヘンデル生誕250年を記念した全曲演奏会が実施された。一部省略はあったが第3部までの演奏で、ドイツ出身の著名指揮者クラウス・プリングスハイムが指揮し、管楽器奏者に海軍軍楽隊の名手を迎え

た堂々たる布陣で、会場もクラシック音楽の殿堂、日比谷公会堂が使われた。ちなみに、こちら後も後日抜粋版がラジオ中継されている。

奇しくも同じ年のかなり近い時期に2つの全曲演奏が実現したわけだが、さてどちらを“初演”と呼ぶべきだろうか。日付なら西の同志社に軍配が上がるが、通し演奏を重視すれば東の東京音楽学校ということにもなる。判断は難しいが、死者の復活と永遠の生という重要な内容をなす第3部を含む演奏がより「本格演奏」と呼ぶに相応しく感じられ、ここでは僅差で「東」としておきたい。

#### いつからクリスマスの曲に？

『メサイア』は救世主キリストの物語なのだから、その降誕日のクリスマスに演奏されるのはごく自然にも思うが、本来は復活祭前の時期(2～4月)向けに作曲されたものだった。この時期は宗教上の理由からオペラなどの娯楽が禁止されており、それに代わる興行として『メサイア』など宗教的な作品が上演されたのだった。

クリスマスに演奏されるようになったきっかけは、アメリカ北東部の都市ボストンにあった。1815年12月25日、ヘンデルと同郷の音楽家が渡米して設立したヘンデル・ハイドン協会という音楽団体の第1回演奏会で『メサイア』の抜粋版が演奏され、さらに3年後の12月25日にアメリカ初の全曲演奏会を開催したことで、アメリカでは『メサイア』といえばクリスマスという認識が広まっていった。

第二次世界大戦後、アメリカの文化や生活様式が入ってくるのと歩調を合わせるように、日本でもクリスマスシーズンに『メサイア』を演奏するようになった。特に、西の雄たる同志社では終戦の翌年にはオルガン伴奏による抜粋演奏を再開し、1948(昭和23)年12月にオーケストラ伴奏による全曲演奏も実現すると、その後毎年12月に全曲演奏会を開催するようになった。京都では「メサイア演奏会がなければクリスマスも正月も来ない」とまで言われるほどの評判だったという。一方の東京藝術大学も1951(昭和26)年12月に戦災孤児支援を目的として「メサイア・チャリティコンサート」を開催し、それ以来現在まで「藝大メサイア」の名称で広く親しまれている。戦後は大学の合唱団を中心に多くの団体が盛んに『メサイア』を演奏するようになり、主なものだけでも、KAY合唱団、東京女子大学クワイヤ、立教大学などがクリスマスシーズンの演奏会を恒例としてきた。

これらの中には残念ながら存続していないものもあるが、その活動を通じて『メサイア』は日本の聴衆に広く定着した。サントリーホールの『メサイア』もその流れを汲むものであり、今後も長期間にわたって開催されることを強く望みたい。

※ 本原稿の内容は、2018年の執筆時点で判明している情報に基づく。

(かわむら やすこ・ヘンデル研究)